

令和元年6月6日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07247

研究課題名(和文) 文献学の手法による近代方言史の構築

研究課題名(英文) Study of modern Japanese dialect history by philological approach

研究代表者

竹田 晃子 (TAKEDA, Koko)

立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員

研究者番号：60423993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)： 地方教育資料における方言を扱った内容の調査・収集・整理を通して総目録を作成し、地方教育資料による方言研究の手法のモデル化を試みた。具体的には、図書館・文書館などにある資料の閲覧・複写・電子化を経てデータベースを作成しつつ、次のような手順で言語的分析を行った。既存資料(全国調査資料や方言辞典類・調査報告類)との比較を通じて、地方教育資料の方言資料としての検討・分析を行った。さらに、文法や語彙、方言分布を分析したうえで、社会における方言や地方教育資料の果たす役割を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、これまで不明だった現象(条件表現形式の由来や、形容詞・動詞を構成する後部要素の地理的分布、敬語と卑罵語の対応関係と地理的分布など)を具体的に解明することができた。本研究で収集・整理された近代の地方教育資料目録は、これまでの方言研究で扱われてきた研究資料の範囲を拡張することになり、伝統的方言の衰退・消滅に伴って話者への面接調査が難しくなる将来の方言研究において、資産的意義を持つことになる。また、明治・大正・昭和初期の日本における方言や方言研究の位置づけを把握する資料として、新たな資料を得ることになる。

研究成果の概要(英文)：The dialect written on "local education-related document" was analyzed by this study. A document catalog was made and the method to do dialectology by "local education-related document" was modeled.

Consideration and an analysis as dialect material of local educational material were performed through the whole country investigation and comparison with a dialect dictionary. I cooperated with other dialectology persons, considered the value as the linguistic material of a dialect and analyzed social placing by the dialect and the role of "local education-related document".

研究分野：日本語学

キーワード：日本語学 国語学 方言研究 教育学

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本の方言学は明治末期から大正・昭和初期に最初の隆盛期を迎え、世界的にみても早い時期に国家的プロジェクトによる調査や個別地域の詳細な調査が全国で行われ、貴重な調査報告が蓄積されてきた。学史的評価は高いが、これら进行分析対象とした研究は多くない。

背景には、戦後の学問分野の成熟に伴う調査第一主義（自らが調査した資料でなければものをいえない）の浸透や、日本語研究と国語教育が乖離し、専門性の高くない調査者による調査報告を避ける傾向が生じたこと、肉声を伴う生きた方言を対象とする方言研究が多いこと、方言を含む日本語史研究では言語地理学的研究や社会言語学的研究のほかに文献を扱う場合の主な研究対象は江戸期までの古典で近代の資料は扱われてこなかったこと、近代国家形成と方言（地域言語）の関係を分析する場合にも視点が中央に偏りがちで各地域についての記述は不十分であるなど、複合的な背景がある。

さらに、戦後の方言研究では、明治・大正・昭和期の方言研究を中心的な立場で行ってきた地方の教育関係者による貴重な方言調査資料があるにもかかわらず、これらを積極的に分析してこなかった。具体的には次のような研究上の問題点がある。まず、教育関係資料は各地に散在していて、存在自体を知られていないことが多い。また、研究対象にされる機会がなかったため、目録がほとんどないことが活用を阻む大きな要因になっている。さらに、これまでは都道府県内など狭い範囲で共有され、参照される機会があったが、広域で俯瞰する視点から把握されることがないため、利用法が一般化していない。このようなことから、利用のためには整理・入力などの資料整備や、すでに評価が行われている既存の他資料との比較による資料的価値の検討が必要になる。

一方で、伝統的な方言は急速に衰退しており、近い将来、従来のような方言話者への面接調査による研究は困難になるため、方言研究は過去の文献資料によって行われるようになると予想されている。方言を含む日本語の研究をより豊かなものとして発展・継続させるために、文献資料进行分析対象とする方言研究の手法を確立する必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究は、明治・大正・昭和期における地方教育資料を中心とした近代方言資料目録を作成し、各資料の具体的な分析を行う。これらの資料は、広域で積極的に把握されることがないため、第一には、方言資料としての有効性を具体的な分析によって明らかにすることを目的とする。第二に、過去の方言状態や方言意識を明らかにすることによって、現代の方言状態や方言意識の背景事情を解明することができることもくろまれる。この目的の延長線には、第三の目的として、方言資料の範囲の拡大ということがある。現代の話者への面接調査では得られない言語事実や方言史を明らかにしつつ、文献資料を用いた近代方言史の手法を確立することによって、今後の方言研究の対象を確保するというねらいである。

### 3. 研究の方法

これまで断片的に行われてきた次のような個別の取り組みを体系的に整理し、目的の達成をはかる。(1) 近代地方教育資料の収集と整理：全国の図書館・文書館等で雑誌資料や調査資料の探索・閲覧・複写を行う。続いて文献題名・著者名・掲載雑誌名・発表年・対象地域・対象言語事象・所蔵機関等についてデータ入力作業を行い、目録を作成する。(2) 地方教育関係資料の分析と再評価：方言資料として積極的な分析を行うことで、これまで利用されてこなかった地方教育関係資料の価値を再評価しつつ、方言資料として方言研究史上に位置づける。(3) 明治・大正・昭和初期の方言の変容把握：地方教育関係資料を近年の大規模方言調査データと比較することで、近代の方言の変容をとらえる。(4) 文献学の手法による近代方言史のモデル化：これまで重点的に取り組んできた東北地方を中心に、教育関係資料を方言研究に利用した事例研究を行い、他地域でも同様の取り組みを可能にするべく、方法論を整理する。

### 4. 研究成果

明治・大正・昭和初期における教育雑誌・刊行物・調査資料等における方言に関する記述を可能な限り収集・整理し、文献題名・著者名・掲載雑誌名・発表年・対象地域・対象言語事象などの項目を中心に目録を作成した。

この作業と並行して、収集した地方教育関係資料を、既存資料（『方言文法全国地図』『口語法調査報告書』『日本言語地図』『方言文法全国地図』など）と比較することで、方言資料としての資料的価値を見定め、利用可能な方法について検討した。さらに、表記・文体・社会構造・文化的背景など言語情報へのアクセスを妨げる要因を排除するため、同じ著者の別資料と比較したり、同時代の研究史や教育現場の状況と比較したりすることで、資料の性質把握につとめ、資料をより安定的に利用できるよう整理した。

これらの資料には、表記されたものとはいえ、伝統的方言が活力を持っていきいきと用いられていた時代のデータを積極的に分析対象とできるという特徴がある。実際に地方教育関係資料を整理する中で、当時の方言状態と方言意識の双方を把握できるようになった。資料の収集と目録化の継続が今後の課題であるものの、具体的な分析は次のようである。

言語的な分析については、特に語彙・文法現象を中心に、主に次のような成果を得ることができた。東北地方の条件表現形式において由来が不明だった形式について、地方教育関係資料

などから形式の地理的分布とその経年変化を分析することで、当該形式とそのバリエーションを整理することができ、由来を解明した。全国方言の卑罵語について、卑罵語と敬語の地理的分布を重ね合わせて異同を明らかにすることで、両表現形式の発達にも地域差が見られることを論じた。オノマトペの用言化に使われる接辞について、地理的分布を明らかにしたうえで、東北方言と琉球方言の用法を比較した。昭和初期の文学作品における表記法を現代的視点から点検しつつ、明治・大正・昭和期の地方教育関係資料と比較することで、当時の方言音表記法と実際の発音の関係を明らかにし、話しことばの表記法という観点から昭和初期までの作文教育と方言研究の関係を再考した。

方言意識の分析については、方言を使わず標準語を使うように指導するという当時の全国的な指導方針の影響を受けつつあり、それが教育関係資料にも反映されていることがわかった。一方で、当時の教育現場には、方言を抑圧する方向だけではなく、地域における方言の価値を認める考え方があり、両方の立場が記述されていることが明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

「東北方言の癖：話し手の認識を表す文法形式と沈黙する東北人」/ 竹田晃子 / 『日本語学』 / 査読無 / 37-01 / pp.14-24 / 2018年

〔学会発表〕(計3件)

竹田晃子(2018)「災害時の地域言語(方言)とコミュニケーション」/ 日本語教育学会 2018年秋季大会

Koko TAKEDA(2018)、*Geographical distribution of verbs and suffixes verbalizing mimetics* (Tradition and Innovation in the Japanese language、International Symposium on Japanese Studies)

大野眞男・竹田晃子・小島聡子(2018)「岩手県沿岸被災地の小・中学校における方言理解教育の支援」第2回実践方言研究会

竹田晃子(2017)、「オノマトペにも方言があるか？」第11回NINJALフォーラム：オノマトペの魅力と不思議

〔図書〕(計7件)

『県別 方言感覚表現辞典』/ 真田信治・友定賢治・道場 優・坂本幸博・今村かほる・竹田晃子・武田 拓・大橋純一・澤村美幸・白岩広行・佐藤高司・新井小枝子・亀田裕見・坂本 薫・阿部新・加藤和夫・吉田雅子・山田敏弘・太田有多子・岸江信介・松丸真大・辻加代子・高木千恵・都染直也ほか / 東京堂出版 / 370(8-9、98-106) / 2018年

『シリーズ日本語の語彙 8：方言の語彙 日本語を彩る地域語の世界』/ 志村文隆・新井小枝子・小川俊輔・小林隆・櫛引祐希子・椎名渉子・八木澤亮・作田将三郎・大西拓一郎・半沢康・佐藤高司・大野眞男・小島聡子・竹田晃子・坂喜美佳 / 朝倉書店 / 216(162-176) / 2018年

『感性の方言学』/ 浜野祥子・小林 隆・定延利之・半沢幹一・竹田晃子・高丸圭一・平田佐智子・友定賢治・小野正弘・田附敏尚・小西いずみ・有元光彦・船木礼子・深津周太 / ひつじ書房 / 256(91-177) / 2018年

『日本語条件文の諸相 地理的変異と歴史的変遷』/ 有田節子・江口正・前田直子・鈴木泰・矢島正浩・青木博史・日高水穂・三井はるみ・竹田晃子 / くろしお出版 / 256(213-238) / 2017年

『敬語は変わる 大規模調査からわかる百年の動き』/ 井上史雄・尾崎喜光・鏑水兼貴・柳村裕・蔵屋伸子・辻加代子・彦坂佳宣・竹田晃子・西尾純二・松田謙次郎・阿部貴人・金順任・影国躍 / 大修館書店 / 298(86-88)(199-216) / 2017年

『賢治学4号』/ 大野眞男・石井正己・岡村民夫・山本昭彦・宮澤明裕・大須賀匠・竹田晃子・小島聡子・田中成行・山本昭彦・木村直弘・アスィエ サベル モガッダム・清瀬六朗・高橋在也ほか / 東海大学出版 / 230(44-60) / 2017年

『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』/ 窪園晴夫・浜野祥子・小野正弘・竹田晃子・秋田喜美・岩崎典子・今井むつみ・坂本真樹 / 岩波書店 / 165(47-63) / 2017年

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究分担者  
研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者  
研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。